

『マイスマールランド』

監督・脚本：川和田恵真

出演：嵐莉菜／奥平大兼／アラシ・カーフィザデー／リリ・カーフィザデー／
リオン・カーフィザデー／韓英恵／吉田ウーロン太／板橋駿谷／
田村健太郎／池田良／サヘル・ローズ／小倉一郎／藤井隆／
池脇千鶴／平泉成

2022年／日本・フランス／114分



公式サイト

DVD 発売中
販売元：バンダイナムコフィルムワークス
© 2022 「マイスマールランド」製作委員会

社会を旅する シネマ

きっともっと 近くなる
きっともっと 知りたくなる

日本の難民認定率の低さはよく知られているところだろう。だが知られているからこそ、次第にその「情報」に麻痺し、「認定しない」ことが誰から何を奪うのか、にまで意識が及ばなくなってしまうのだろうか。本作は日本で難民認定を待ちながら暮らすクルドの人たちから聞いた経験談や思いを、濃く、しかしとても自然でリアルに紡いでいる劇映画だ。

主人公のサーリヤは埼玉の高校に通う17歳。母国で政治情勢により命の危険を感じた父親に、幼い頃日本へ連れてこられ、日本で育ったクルド人だ。難民申請を続けながら妹と弟と家族4人で暮らす。大学進学を目指し、アルバイトを始めたサーリヤは、バイト先で東京の高校に通う聡太と出会い、ふたりの距離は次第に近づいていく。

ある日、難民申請が不認定になったとの知らせが飛び込んでくる。父親は母国での拷問の傷を見せ、「これでも難民じゃないですか!」と怒りをあらわに訴えるも、職員は「私にはわかりかねます」と平静な表情で4人の在留カードに穴を開けていく。「仮放免」になった家族は、働いてはだめ。県外への無許可の移動も禁止。健康保険も失効。だが働かずして生きてはいけない。父親は秘密裏に仕事を続けるも、不法就労が見つかり、入管施設に収容されてしまう。家に残された3人の子どもたちは……。

映画の中には高校でのサーリヤの姿も多く描かれている。同級生たちとの他愛ない会話に笑う彼女は、いたって普通の高校生だ。だが友人たちと違い、彼女はさまざまなものを奪われている。

サーリヤの勉強机の前に貼られたたくさんの付箋には、日本語を話せない近所のクルド人のために、彼女がやらねばならないことが書かれている。彼女自身のための付箋はない。また、難民申請中で

「難民認定しない」ことが ひとりの女性から奪うもの

アーヤ藍

日本語での会話が難しいクルド人を雇う仕事は限られる。多くが力仕事で男性が重用されるもの。だから女性は、結婚して家事を担うのが「順当」な道。17歳のサーリヤも、クルドの仲間たちから折に触れて結婚という道を突きつけられる。クルドコミュニティにおける家父長制の影響もあるとはいえ、もし難民として認定され、学業や仕事の選択肢が男女問わず広がれば、サーリヤのような女性たちも自分自身の人生をもっと自由に歩めるはずだ。

さらに、在留資格を失った彼女は、努力の末に手にした大学への推薦枠まで失ってしまう。さまざまな理不尽を飲み込み受け止めてきた彼女が、ほぼ唯一、自分のために願い望む「小学校の先生になりたい」という夢さえ、あっけなく奪われる。彼女の世界はどんどん狭く小さくなっていく。

サーリヤの境遇を見て「日本の制度はやっぱりおかしい!」と言えは多くの人がうなずくだろう。だが、その制度は紛れもなく私たちがつくっている。本作には「悪意のない人たち」が次々登場する。「日本語がお上手ね」など、無自覚に「あなたと私は違う」と線を引く人たち。大変そうなサーリヤに思いやりを示すようで、いざ自分にもリスクが降りかかると思えばさっと身を引く人たち。「悪」だとはっきりは言えないグレーの私たちが、日本のおかしな制度を支えてしまっているのだ。「私たちが奪っている」。自分を主語に語ることから始めなければ。

アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

